

船頭 (大津絵の内)

船頭殿の顔の色

ちつと眺めて竹煙管

おかんだちでもあんべいか

そりやこそ雷おちてびつしやり肝冷す

篠を束ねて突くよな雨に

濡れて通うか

憎からぬ

其御鼻負の旦那を送り江戸船の

わつちや是でも水道の水が

染み渡つたるありがたさ

お恵み受けてのぼり船

「モシ河岸を突きやすよ

あたりやす

相手嫌はぬ勇肌

恐いものなく悪体を

こは言ふも

「コレかみなり

さあ落ちるなら落ちて見る

今年で丁度

「二十年の江戸っ子だア

蝦夷松前のお方で

又は東のわつちらでも

心に二ツはないわいな

これも偏へに皆様の

お蔭で小いろも土地柄で

言ふも惚気て受けさせる

此頃あひるの女めに

かゝとぢやないが喰ひこまれ

こつちも血道を上汐に

客と 船頭の

二人前

とうとう小づりを入揚げて

とどの詰りは

どう考へて見ても

末は詰らぬころつきは

今日かみなりの

仲間入り

ならひ心にやってくりよ

扱もおかしや

雲の上からころり

ころり

ころりころりと

仰山な

かみなりどんの色恋は

太鼓を腰にくつつけて

虎の皮の頬冠り

光つて見せてぶらと

鳴るがしよざいでそりやこそ

そりやこそ

落ちて

恋しやる わけもなや

こいつは飛んだ色事と

勇みは浪を走るもの

悪い地口も出たらめで

いつもの酒屋へ

走り行く。